

外へ出る、外を知る、外を楽しむ



いざむ アミール偉

福島県立医科大学医学部放射線健康管理学講座
[960-1295] 福島市光が丘1番地
助教, 博士(学術).
専門は翻訳学, コミュニケーション論.

事ある毎に「自分は、いまなぜ『医学部』で仕事をしているのだろうか?」と考えることがある。東京工業大学工学部に入学後、2年時に進級する際に、学科選択で高分子工学科を選んだ約20年前には、まったく想像もつかなかった。

東工大で高分子工学の修士号を取得した後、私はそのまま東工大の博士課程に進学し「言語学」、その中でも「翻訳学」を専攻した。なぜ「言語学」を専攻したのかと問われると答えが長くなるので割愛するが(興味のある方は、iamir@fmu.ac.jpまでご連絡ください)、高分子工学という元々の学問の外へ出たのである。

博士課程の初期、指導教員からの勧めで、イギリスへ留学する機会をもった(博士課程は、1年休学)。周りには日本人の大学院生がほとんどおらず、ひたすら英語と格闘する毎日であったが、日の出前や夕方の空をボーっと眺めたり、森の散歩やランニング、街中にあるパブでぬるいビールを飲むことが息抜きだった。この期間は、授業の予習や復習、さらにはエッセイの執筆などで手一杯だったが、「学問とは何か」「将来、自分はどんな人間になりたいか」などをよく考えた。日本にいと、なかなか時間を取りにくい、日本の外に出て異文化の中に身を置き、自分自身と向き合いながら一つのことをじっくり考える時間が、大切なかもしれない。

帰国後に博士課程へ復学したが、論文がなかなかまとまらず、先に就職しようと考えた。初めは国家公務員を目指していたが、試験に失敗。目の前が真っ暗になったが、気持ちを切り替え、友人が紹介してくれた「専門調査員」の試験を受験し合格。フルタイムでの初の勤務先は、アメリカのボストン総領事館であった(この間も、1年休学)。おもに科学技術・学術分野を担当し、日米間の科学技術交流を推進する仕事に就いた。任期中には、安倍元総理のボストン訪問や、2度の叙勲を担当するだけでなく、日本からボストンへ留学していた博士研究員の方々、現地の病院や研究施設で働く医師や研究者とのネットワークが築け、いまの自分の大きな財産となっている。

ボストンでの大きな衝撃は、仕事でお会いする方々のほとんどが、国籍に関係なくPh.D.をもっていること

であった。世界に目を向ければ、どの職種に就こうとも、物事を動かす人材のほとんどがPh.D.を取得していることが普通なのだと実感した。日本では気づけなかったことを日本の外に出て気づくことができ、それが私にとってPh.D.取得へのモチベーションの一つとなった。

また、アメリカでの勤務で驚いたことは仕事の捉え方である。職種にもよるが、基本的に朝は早く08:00前には業務が始まり、夕方16:00過ぎには終業し、16:30頃には駅へ向かう人の流れができる。「残業」という概念はほとんどなく、オフィスでのスタンディングデスクやチャットツールの活用など、いかに「楽」して業務効率を上げようとしているかを知れた。ボストンから日本に帰国した直後、私は霞が関の某省で勤務したのであるが、その当時の非効率的な働き方に大きな衝撃を受けたことは言うまでもない。

2018年の3月にPh.D.を取得後、2020年6月にはボストン勤務時代のご縁から環境省で勤務し、その後さらなるご縁をいただいて、2022年4月より福島県立医科大学医学部での勤務がスタートした。私は医師ではないが、Ph.D.をもっていたため助教として着任できた。現在は、医療現場における「翻訳」の必要性や、自分と立場の異なる人々との「コミュニケーション」に関する講義や研究を行っている。加えて、イギリスやアメリカなどでの経験を買われ、国際原子力機関(IAEA)や国際放射線防護委員会(ICRP)と福島県立医科大学との国際連携などにも参加させていただいている。

自分のキャリアを振り返ると、常に外の世界へ飛び込むことを楽しんできたような気がする。いま自分がいる世界の外へ出るという決断には、ものすごく勇気がある。だが、一度そこに飛び込めば想像もつかないような素晴らしい機会に恵まれる。自分が実感するのは、元々の専門分野の外へ、また日本から海外へ出た経験によって、新たな視点が獲得でき、キャリアの幅が大きく広がったということだ。もし、将来の自分のキャリアで悩んでいる方がいたら、いまの専門にこだわり過ぎず、新しい世界へ一歩を踏み出してほしい。

最後になるが、今回この記事を執筆するご縁をくださった、故打田 聖先生(2020年1月にご逝去)に哀悼の誠を捧げて、筆を擱きたい。